多雪地方都市住民の雪害観についての一考察

著者	沼野 夏生
雑誌名	国立防災科学技術センター 研究報告
巻	32
ページ	89-105
発行年	1984-03
URL	http://doi.org/10.24732/nied.00000907

国立防災科学技術センター研究報告　第32号　1984年３月

624.144

多雪地方都市住民の雪害観についての一考察

沼　野　夏　生*

国立防災科学技術センター新庄支所

A Study of "Viewpoints on Snow Damage" of Inhabitants in a Snowy Local City

By

Natsuo Numano

Shinjo Branch, National Research Center for Disaster Prevention, No. 1400, Takadan, Tokamachi, Shinjo-shi, Yamagata-ken 996, Japan

Abstract

Sometimes, an establishment of effective countermeasures against snow damage has been interrupted by a variety of viewpoints of inhabitants on snow problems. This report deals with an analysis of some factors which produce variations of "viewpoints on snow damage". The analysis is based on an inquiry into individuals in Shinjo-shi, a snowy local city.

"Viewpoints on snow damage" were regarded as eleven items on consciousness related to snow damage, namely, feeling of difficulty on snow damage, degree of reliance in reduction of snow damage in future, and opinion that who should be the main constituents to counter snow damage. Through the analysis, it became clear that the variations of "viewpoints on snow damage" are explained well with consideration of "pattern of attitude" between objective conditions of inhabitants and their "viewpoints on snow damage".

The "pattern of attitude" was considered into four typical types, i.e., "conscious settlement type", "passive settlement type", "active settlement type" and "migrant type", after an examination on ten attributes in attitude by the method of Hayashi's quantification theory No. 3. These four types can be expressed in terms of four quadrants of a two-dimensional semantic space whose horizontal and vertical axes express degree of individualism and degree of passivity for life-environment, respectively.

In this analysis, it was found that the "pattern of attitude" of inhabitants are

---

* 主任研究官

affected by their individual attributes, namely, ages, occupations and life histories of migration, and also that "viewpoints on snow damage" of inhabitants reflect cartain traits of their "pattern of attitude".

1. 緒論

雪害といわれる事象を他の自然災害と比較してみると，その著しい特徴のひとつは「日常性」の強さにあるということができる．一般の自然災害が「異常現象」とされるのに対し，雪害においては異常現象と日常生活上の諸困難や雪による生活圧迫との区別は難しい．しかも見逃せないのは，社会生活形態の変化に伴いこうした雪による日常生活の圧迫現象が，雪害問題の諸局面の中でその重要度を増してきていることである．

雪害のこのような特徴は，雪害に対する見方や心構えが，時代背景や主体のもつ諸条件によって大きく変化しあるいは異なるという事実をもたらしていると思われる．人命や財の損失という異常かつ不可逆的な事態の回避は，比較的わかりやすい目標である．これに対し，日常的な雪問題の取扱いに関しては，様々な主観的色どりが可能といえる．例えば，多量の降雪のあと，市町村には除雪の催促の電話が相次ぐ一方で，除雪車の騒音など除雪作業上のトラブルをめぐる苦情が届くといった事態が珍らしくない（例えば弘前大学雪問題法制研究会，1982）．雪害対策においては，その課題についての地域住民の合意の形成に特有の困難があると考えられる．

雪害における主観的性格の強さを考えるとき，雪害や雪の問題をめぐる地域住民の意識構造を解明する課題は極めて重要であるといえよう．それは，地域住民の合意を形成すべき雪害対策の内容の検討や合意形成の見通しを立てる上で不可欠であるが，さらに，多雪地域に住みつき，地域を住みこなす人々の形成やその主体的力量の展望を与える作業にもつながると思われる．

本稿は，多雪地域の小都市住民に対する調査結果をもとに以上のような課題への接近を試みるものである．なお，従来も地方自治体などによる住民の意向調査が，雪害対策への参考資料とする目的で度々実施されている[*1]．しかしその多くは意向を直接集計するに止まり，意向の客観的背景や意向の背後にある意識構造への留意ははとんどみられない．また筆者らも，さきに雪について困難を感じる具体的項目（雪害感）の分析を行っている（沼野・東浦，19

＊1　例えば，山形県長井市（1979）：雪国のまちづくりについての住民アンケート調査，秋田県大曲市（1980）：市民意識調査（雪に関して），秋田県大森町（1981）：「克雪利雪まちづくり」のためのアンケート調査，等々多数にのぼる．またこれらとは別に（総合開発研究機構ほか，1979）では，一般的な生活意識の変貌と雪対策のあり方との関連について考察がなされている．

82）が，苦痛感といういわば受動的側面のみの検討に止まっている．そこで本稿では，雪害への対応などを含むやや一般的な意向群（雪害観と呼んでおく）をとりあげ，その客観的諸条件をさぐるとともに，客観的条件と雪害観との間に人生観や処世観に通じる「態度の型」の介在を想定し，その抽出とそれによる雪害観の理解を試みてみたい．

なお，調査は山形県新庄市の20才以上の住民を対象とし，1983年（昭和58年）3月に，質問紙への自己記入による郵送調査の形式で実施した．対象者の選定は選挙人名簿（総数30,690人）から等間隔抽出によって行った．対象者数は808名，有効回収数は428，回収率53％であった．調査年の冬期の最大積雪深は122 cm（新庄支所気象観測露場，2月22日）であり，平年より小さく，比較的寡雪の年であったといえよう．

2. 雪害観とその諸要因

雪害観の指標として11の質問項目を設定したが，まずその回答の単純集計を試みると表1及び表2のようである．多くの項目では特定のカテゴリーに集中する傾向がみられ，分析を進める上で必ずしも好ましい結果が得られていない．この傾向のひとつの原因は，質問項目の多くが一般的・抽象的性格の強いものであるため，回答がかなり「建前」的なものになったことによるのではないかと考えられる．その中で，［暮しの中での雪の問題］［どこまでを雪害というべきか］［生活道の雪処理］［雪害の宿命視の是非］などの項目には，比較的意見の分散がみられる．

次にこれらの雪害感と各種の客観的条件の関連を調べる目的で，関連の強さの指標としてクラマー係数[*2]を算出してみた（表省略）．客観的条件としては，主体属性指標（性，年齢，職業など）と生活環境指標（居住地類型[*3]，除雪道までの距離，住宅の規模など）に大別し，25の条件項目についてみた．これらのクラマー係数の平方根は最大でも0.24（住宅における高床式採用の有無と将来の雪害防除への期待感の間の関連）に止まり，0.2以上はこれも含め2組しかなく，全般に低い値であった．しかも，特に生活環境指標については，全体的に因果関係の解釈もしにくいものであった．少なくとも個別的関連をみるかぎりでは，客観的諸条件と雪害観の間には明瞭な関連は見出しにくいといえる．

そこでさらに，比較的雪害観とのかかわりを予想しやすいいくつかの客観的条件（表3）を選び，ＡＩＤ法[*4]を適用して雪害観の要因分析を試みた．この手法は外的基準の級間平方和が最大になるように，カテゴリー値によるサンプル群の2分割を繰り返してゆくもので，

＊2　カイ自乗系統の属性相関係数の一種（安田，1969）．無関連のとき0，完全関連のとき1の値をとる（$0 \leq Cr \leq 1$）．

＊3　旧市街地（世帯数減少），新市街地（世帯数増加），近郊地区，農村地区，の4区分とした．

＊4　ＡＩＤとはAutomatic Interaction Detectorの略である（文部省統計数理研究所，1976）．

表１　「雪害観」の設問に対する回答状況（その１）

暮しの中での雪の問題をどう感じるか	大変つらいものに感じる	ある程度つらいものに感じる	あまりつらいとは感じない	全くつらいとは感じない	どれともいえない・わからない
	45.5 (192)	44.8 (189)	8.8 (37)	0.5 (2)	0.5 (2)
将来雪害は防ぐことができると考えるか	大部分をなくすことができると思う	ある程度なくすことができると思う	ほとんどなくすことができないと思う	将来かえって雪害は増えると思う	どれともいえない・わからない
	4.5 (19)	82.9 (349)	8.8 (37)	1.2 (5)	2.6 (11)

雪害の軽減・防止上一番大切だと考えるものは	個人の努力	隣近所の協力	市町村行政の努力	市町村行政と住民の協力	県や国の行政努力	その他	どれともいえない・わからない
	2.9 (12)	5.9 (24)	4.9 (20)	62.9 (258)	19.8 (81)	1.7 (7)	2.0 (8)

どこまでを雪害というべきか	雪のため人が死んだり、物がこわれたりすることだけをいうべきだ	それだけでなく、大雪で地域社会のはたらきや交通がマヒすることも含むべきだ	それだけでなく、雪のための出費や雪処理の苦労などで日常の暮しが大変になることも含むべきだ	それだけでなく、雪が人々の心に及ぼす精神的な重圧や苦痛も含むべきだ	どれともいえない・わからない
	1.0 (4)	36.0 (141)	38.0 (149)	22.2 (87)	2.8 (11)
生活道（生活上必要な私道や里道等）の雪処理はだれがやるべきか	すべて住民がやるべきだ	原則として住民がやるが、手におえない場合など事情によっては行政が援助すべきだ	原則として行政がやるが、違法な建築の場合など事情によっては住む人もやるべきだ	すべて行政がやるべきだ	どれともいえない・わからない
	1.0 (4)	65.9 (270)	27.8 (114)	3.2 (13)	2.2 (9)

注．上段の数字は比率（単位は％）、（ ）内は例数

表２　「雪害観」の設問に対する回答状況（その２）

雪害観項目 / 回答	雪害は雪国に住む者の宿命であり、耐えしのばなければならないものだ	雪害は人間の英知で克服できるからあきらめず技術開発や創意工夫を重ねるべきだ	雪を邪魔物扱いしたり、逆にあきらめて引きこもるのでなく、雪と楽しくつきあうべきだ	雪害に対して力を合わせることから住民のまとまりや連帯感を育てていくことができる	雪害をなくすには雪が降ってからの除雪だけでなく計画的な雪に強いまちづくりが必要だ	雪害をへらすためなら、家の建て方や土地利用にある程度の規制がされてもやむを得ない
そう思う	35.8 (148)	87.0 (361)	61.8 (254)	71.3 (291)	96.1 (397)	73.7 (302)
そうは思わない	53.8 (222)	4.1 (17)	17.5 (72)	11.8 (48)	1.5 (6)	8.8 (36)
どちらともいえない	10.4 (43)	8.9 (37)	20.7 (85)	16.9 (69)	2.4 (10)	17.6 (72)

主体属性	1．性別 2．年齢階層 3．学歴 4．居住歴 5．雪処理上の役割 6．家としての主な職業
生活環境	7．除雪道までの距離 8．自家用車の有無 9．住宅所有形態 10．住宅形式

表3　ＡＩＤ法に用いた客観的条件項目一覧

常識的に理解しやすい半面，データの因果的構造をある程度推測できるという利点をもっている．

雪害観を数値化して外的基準とする必要があるため，以下の操作を行った．［暮しの中での雪の問題］と［どこまでを雪害というべきか］の項目は，それぞれ回答の各カテゴリーに等間隔の点数を与え，それを外的基準とした．また，［雪害の宿命視の是非］から［雪害への対処から連帯感が育ちうるか］までの４項目については，それぞれで選択されたカテゴリーに±25点（どちらともいえないは０点）の点数を与えて加算し，雪への対応における積極性の程度を表わすものとみなすことにした．

これら３つの雪害観の指標についてＡＩＤ法を適用した結果を図１～図３に示す．まず図１は［暮しの中での雪の問題］の問題視の程度であるが，第１の分割条件は年齢であり，高年齢層において問題視の度合が大きい．さらにこれは，比較的安定的でない職業，さらにＵターン者で強まることから，精神的不安感の要素が強いことが窺える．これに対し低年齢層の場合は，除雪道までの距離という生活環境条件が第２の分割条件として現われており，距離が最長の層の問題視の度合は非常に大きい．これは日常の肉体的労苦の反映であろう．第３分割条件以下の解釈は以上に比べてやや難しいようである．

［雪への対応における積極性の程度］（図２）では，第１の分割条件は学歴であり，中卒の場合指標値が小さくなっている．これはさらに居住歴によって分割され，生まれてからずっと地元に住んでいる人に比べてＵターン者や来住者の値が小さい．一方，高卒～大卒者のグループでは管理職的年代の人々に指標値が高い傾向がある．ところで，以上の傾向から高学歴層が雪に対する積極的対応姿勢をもつと結論するのには疑問が残る．学歴や社会的地位に伴い「建前」が前面に押しだされ，「本音」が陰にかくれたためという解釈もありうるからである．

［どこまでを雪害というべきか］（図３）では，居住歴が第１条件になっている．Ｕターン者や来住者は，地元に住みつづけている人に比べて雪害の範囲を広く考える傾向が強い．その中でも，男子にこの傾向が顕著である．これらの傾向の要因のひとつとして，少雪地域

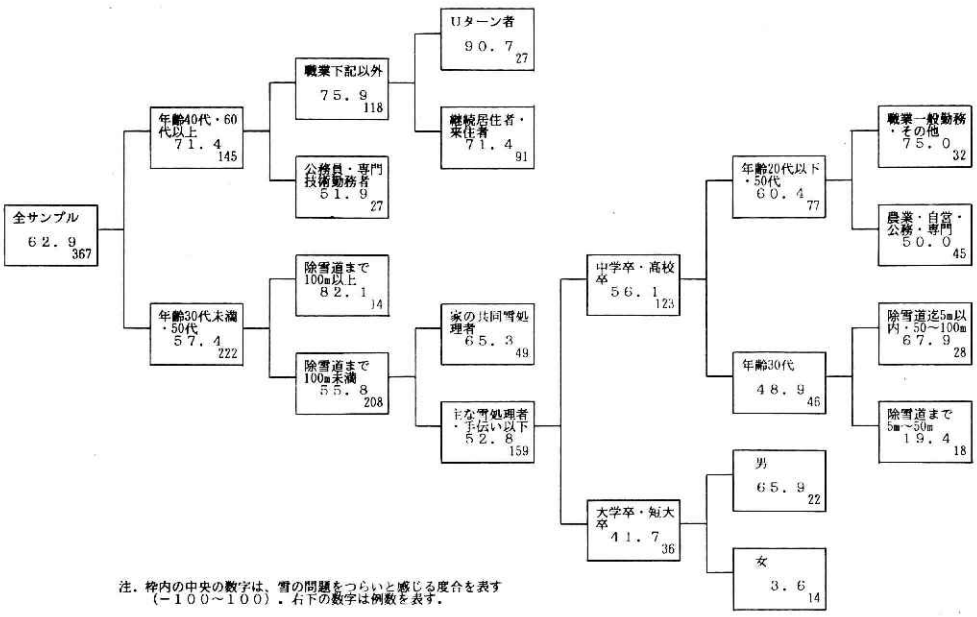


図1　ＡＩＤ法による雪害観の要因の検討　その１・暮しの中での雪害の問題視の程度

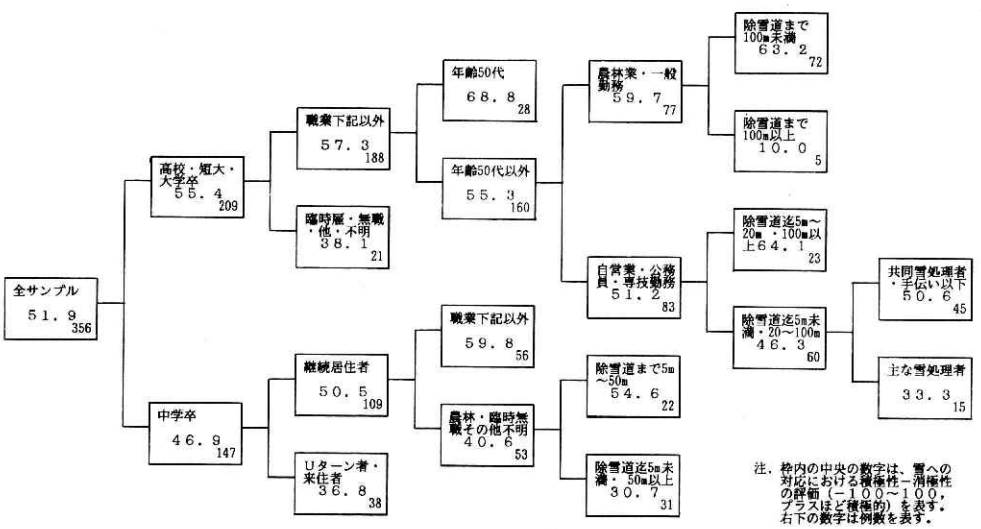


図2　ＡＩＤ法による雪害観の要因の検討　その２・雪への対応に関する積極性の程度

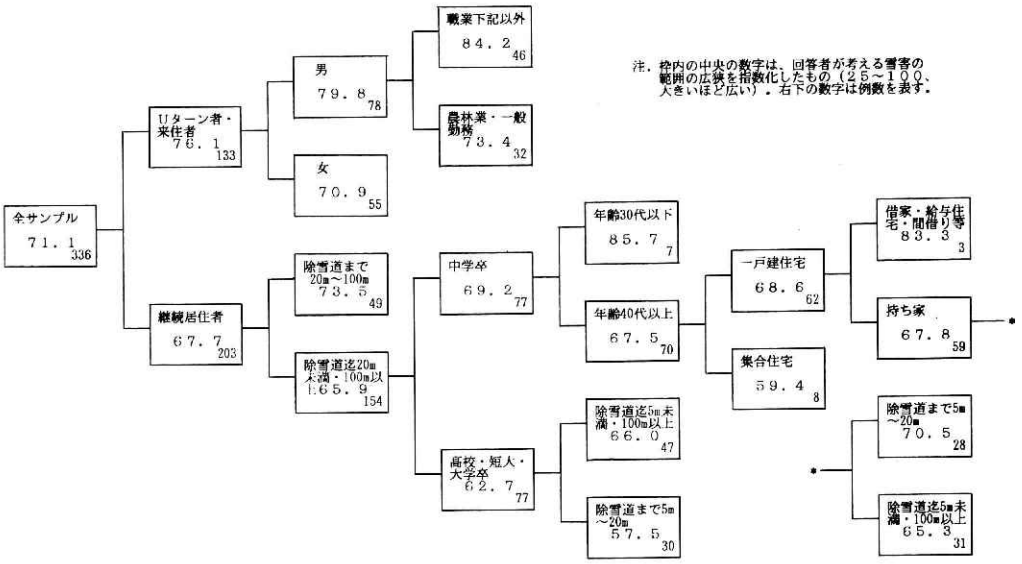


図3　ＡＩＤ法による雪害観の要因の検討　その３・雪害と考える範囲の大きさ

での生活体験を通じて，冬期の日常生活や就業の上での格差感が強められていることが考えられる．また，この項目では住環境指標（住宅形式，住宅所有形態）が分割条件として初めて現われている点が注目される．その結果は，雪害の範囲を広く考えることが日常生活上の雪の問題への困難感の強さと連動すると仮定するならば，無理なく解釈できるように思われる．ともあれ，本項目では回答の中に観念的なものと，具体的な生活体験に根ざすものとが入り混っていることが考えられ，それが比較的解釈しにくい結果を生んでいると思われる．

3.「態度の型」の検討

客観的諸条件が直接雪害観の如何を規定するとは考えにくく，むしろその人の人生観や価値観といった中間項を介して関連しあうと考える方が現実に近いものと思われる．そこで緒論に述べたように，中間項として「態度の型」を想定して，より意味の明瞭な関係を求めてみたい．この態度の型は，一方で客観的諸条件に規定されるとともに，他方では雪害観のあり方を規定すると考えられる．

態度の型の構成要素となるべき態度の指標として，表４に示す10項目を選んだ．この種の指標の設定にはどうしても主観的要素が入ってしまうが，ここでは定住観，自然観，社会的態度などできるだけ広範囲な側面について，典型的と思われる対照的な態度のどちらに共感

表４　態度指標の選択肢の内容

記　号	＋　評　価	－　評　価
A．	どこか他の所に移り住みたい	ずっと今の所に住み続けたい
B．	都会の活気が好きだ	いなかの静けさが好きだ
C．	科学技術の進歩でくらしは便利になる	科学技術の進歩でくらしのうるおいが少なくなる
D．	人間は自然を手なづけ、利用する力をもっている	自然に対して人間の力は小さい
E．	人生は順調なほどよい	人生はある程度苦労がある方がよい
F．	他人にはめいわくをかけたくない	困ったときはお互いさまだ
G．	自分の個性や能力を大切にしたい	円満な人づきあいを大切にしたい
H．	雪国のくらしはつらい	雪国のくらしは楽しい
I．	雪処理は時間や労力のむだ使いだと思う	雪処理に追われる経験も人生の上で役に立つと思う
J．	雪は人づきあいをとげとげしくする	雪は人づきあいを円満にする

するかを尋ねるという形式をとった．雪の問題との接続を意識させるような項目も含めた．

この10項目に対する二分法的な反応について，数量化Ⅲ類[*5]の手法を用いてパターン分類を行った．この場合，10項目について１つでも帰属の表明が留保されていたり，不明があるサンプルは除外し，残った96例を対象とした．従って母集団全体からみれば，態度表明の比較的はっきりした集団を選び出したことになる．

数量化Ⅲ類を適用した結果，第１・第２の２つの固有ベクトルまでで累積寄与率が38.5%となり，データの全変動の約４割が表わされているといえる．この２次元空間における10個の態度指標の散布特性を図４に示す．ここでは２つの軸に何らかの意味づけが可能かどうかが重要であるが，各指標項目の内容から推定して，第１軸は個人志向（＋側）と集団志向（－側）の軸，第２軸は環境順応的（＋側）と環境変革的（－側）という特性の軸，と考えてよいように思われる．このように仮定すれば，図４の第１～第４象限はそれぞれ意味を付与される．

そこで，第１軸・第２軸に対応する各サンプルのサンプル得点の正負によって，サンプルを４群に分類し，その各群における態度指標の選択のされ方を検討してみた（表５）．これをみると，多くの項目（A，B，D，E，G，Iなど）で各群の間に顕著な差異がみられる．

＊５　外的基準のない二分法的反応（多変数）のパターン分類手法である（安田，1969）．沼野・東浦（1982）でも適用している．

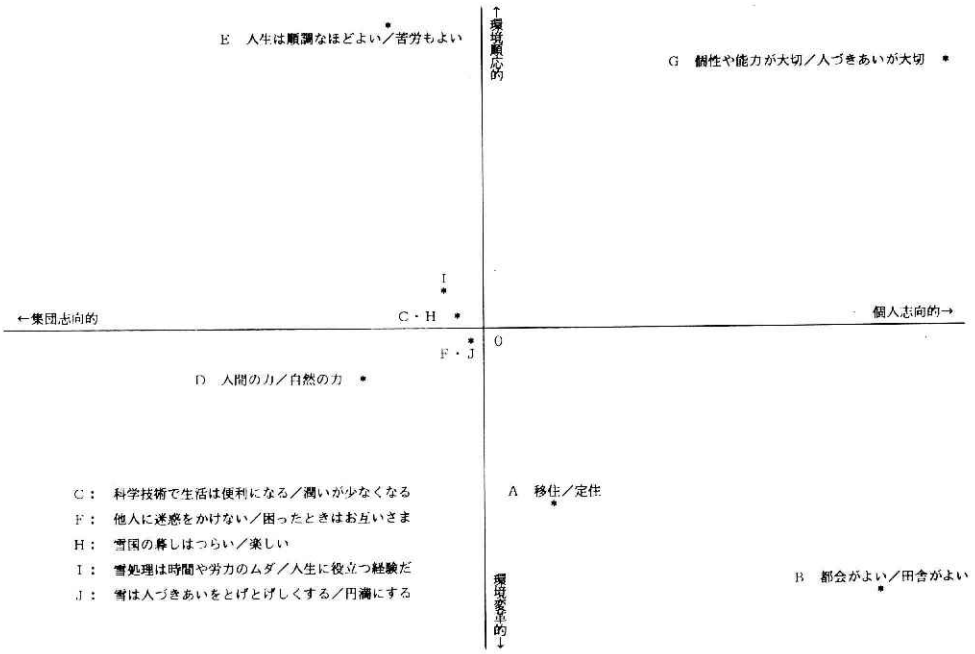


図4　数量化Ⅲ類による態度指標10項目の特性散布図
（第1・第2固有ベクトル，累積寄与率38.5％）

表5　「態度の型」別にみた態度指標の選択傾向

「態度」指標	「態度の型」			
	1自覚的定住型	2転出志向型	3積極的定住型	4消極的定住型
A．移住／定住	41．2	84．6	40．9	22．7
B．都会／田舎	17．6	76．9	——	——
C．科学技術の進歩	76．5	84．6	81．8	86．4
D．人間の力／自然の力	47．1	30．8	86．4	45．5
E．人生の順調さ／苦労	35．3	7．7	——	90．9
F．自立／互助	64．7	61．5	59．1	59．1
G．個性／つきあい	100．0	15．4	——	——
H．雪国はつらい／楽しい	82．4	84．6	86．4	90．9
I．雪処理は無駄／役立つ	58．8	38．5	45．5	72．7
J．雪の人間関係への影響	76．5	84．6	75．0	77．3

注．数字は＋評価のカテゴリーを選択した者の比率（％）を示す

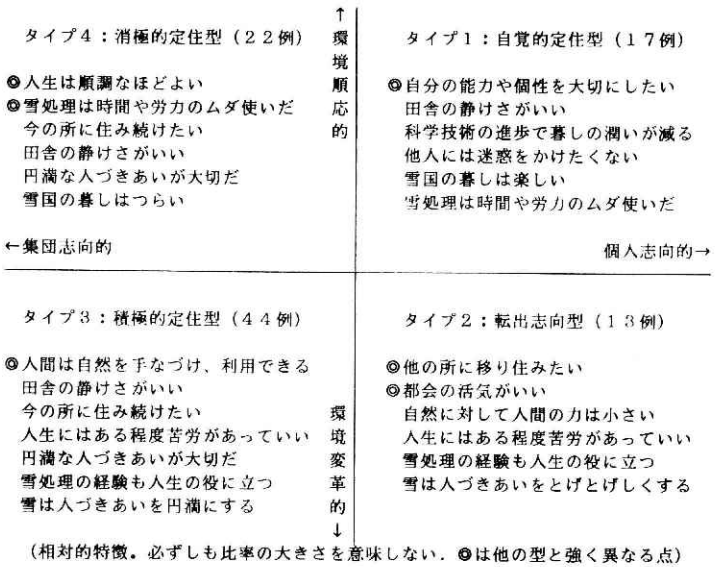


図５　サンプルスコアによる「態度の型」の分類とその特徴

各群の態度指標選択特性をまとめると図５のようになる．◎印は特に際立った特徴である．この４群をタイプ１～タイプ４とし，態度の型と考える．

最も明瞭な性格をもつのはタイプ２である．この型は他所への移住希望，都会志向がとびぬけて強い．そのうえで，自分の周囲を比較的冷静な目で見ていることが窺われる．ただし例数は13例（14%）と最も少ない．この型は＜転出志向型＞といってよいであろう．

残りの３タイプはいずれも「田舎」の生活を好み，定住志向が強い点では共通している．しかしその内容はそれぞれ異なる．まずタイプ３と４を比較すると，前者は人間の力が自然力を克服することに強い希望をもち，雪の問題を試練とは感じながらも，それにうちかってゆくことに人生のひとつの価値を見出しているようにみえる．これに対し後者は，苦労のない順調な人生をよしとし，雪処理の労苦は無駄なことと考えている．こうして雪へのとりくみに人生上の価値を認めないままに定住を求めていることから，タイプ４は＜消極的定住型＞と呼ぶことができよう．同様に，タイプ３は＜積極的定住型＞といってよいと思われる．

タイプ１の場合，全員が「自分の個性や能力を大切にしたい」と答えており，逆に全員が「円満な人づきあいを大切にしたい」と答えているタイプ３・タイプ４と際立った対照を示している．この型は全体として人間関係のわずらわしさや都会生活の味気なさを嫌い，それから逃れる道として田舎での生活に期待をかけているように思われる．いわば＜自覚的定住型＞といえるであろう．ただし，ここでの「自覚的」の意味は，現在の場所での生活が自分には向いていると考えているということであり，使命感などといった積極的な意味ではない

ことはいうまでもない．なお，この型にやや「雪国の暮しは楽しい」とするものが多いことは，注目すべきことであろう．

ところで，図4に示した各軸の意味づけは，上述の4タイプの解釈と矛盾せず，かえって明瞭さを増したといってよい．すなわち，＜自覚的定住型＞および＜転出志向型＞と＜積極的・消極的両定住型＞との対比は，生活の場所の選択について個別的な解決を志向する（あるいは志向した）ものと，地域への定住を前提としつつ地域社会集団に依拠する人生を送ろうとするものの対比である．また，＜転出志向型＞および＜積極的定住型＞と＜消極的・自覚的両定住型＞との対比は，生活環境の改善や向上に意欲をみせるもの*6と，あきらめ感や分相応感をよりどころとして現在の生活環境に順応していこうとするものの対比である．

4. 「態度の型」を通してみた雪害観の存在形態

4.1 客観的諸条件と態度の型

回答主体のもつ客観的諸条件によって，態度の型の出現傾向にどのような特徴があるかをみたのが，表6および表7である．1例を除きいずれもクラマー係数の平方根の値は0.2以

表6 主体属性別にみた「態度の型」の出現傾向

主体属性 / 態度の型	性別 0.21	年齢 0.23	学歴 0.14	居住歴 0.25	生計上の役割 0.23	職業 0.26	居住地 0.23
自覚的定住型（タイプ1）	やや男に多い	低年齢層特に30代に多い	高学歴ほど多い	Uターン層に多い	特になし	公務員と商工自営に多い	農村部特に近郊農村に多い
転出志向型（タイプ2）	やや男に多い	低年齢層特に20代に多い	特になし	Uターン層に多い	生計の主な担い手以外に多い	一般勤務層に多い	近郊及び新市街地に多い
積極的定住型（タイプ3）	男に多い	40代及び50代に多い	特になし	来住者と継続居住者に多い	生計の主な担い手に多い	公務員・一般勤務・商工自営に多い	新旧両市街地に多い
消極的定住型（タイプ4）	女に多い	高年齢層ほど多いが30代にも多い	特になし	転々とした者と継続居住者に多い	生計の主な担い手以外に多い	農業に特に多い	農村部に多い

注．表頭の数字はクラマー係数の平方根を示す．

＊6 ただし生活環境の向上を実現するための方策は対照的である．＜転出志向型＞は自分が移動することにより，＜積極的定住型＞は周囲に働きかけることにより，これを実現しようとする．

上となっており，これをみる限りでは，客観的諸条件と雪害観の各項目を直接クロスしてみた場合に比べて，関連度がかなり高くなっている．

主体属性別にみると（表6），いくつかの注目すべき傾向がみられる．まず個人的志向の強い＜自覚的定住型＞と＜転出志向型＞は，比較的低年齢層に，また居住歴では少雪地域（その多くは首都圏と考えられる）からのUターン者に多くなっている．＜自覚的定住型＞がUターン者に多いことは，その内容を考えれば推測に難くないことである．しかし＜転出志向型＞もUターン者に多いことは，Uターン者が必ずしも定着せず，再び転出する（いわゆるSターン）可能性がかなりあることを示唆するものである．

次に，＜積極的定住型＞と＜消極的定住型＞とを比較してみると，以下のような傾向がある．＜積極的定住型＞は，比較的男子と一家の生計の主な担い手に多い．この2条件はかなり連動しているものと思われるが，さらに家としての主な職業についてみると，公務員などの恒常的勤務者，商工自営業者に多い．他方＜消極的定住型＞は，女子，一家の生計の主な担い手以外のもの，農家家族員に多くみられる．いいかえれば，＜積極的定住型＞は家族や，職域や，地方都市の地域社会等の中心的な担い手である人々の間に多くみられるといえる．この型の態度の形成は，その人が各レベルの社会集団において担う責任の重さと関連があるものと思われる．

生活環境条件と態度の型の関連（表7）をみると，クラマー係数の値そのものは主体属性の場合に比べ小さくはないが，その意味するところの解釈は困難である．これは，生活環境

表7　生活環境条件別にみた「態度の型」の出現傾向

生活環境条件 / 態度の型	除雪道路迄の距離 0.29	車の有無 0.20	無雪期の駐車形態 0.23	住宅所有形態 0.27	住宅規模 0.25	住宅の新しさ 0.24
自覚的定住型（タイプ1）	10m未満層にやや多い	車を持つ層に多い	車庫を持つ層にはやや少ない	民間借家はすべてこの型である	中間規模（40～70坪）層に多い	古い家に比較的多い
転出志向型（タイプ2）	20m以上層、特に100m以上に多い	車のない層に多い	上に同じ	特に傾向なし	小規模層（20～40坪）に多い	特に傾向なし
積極的定住型（タイプ3）	平均的に分布	特に傾向なし	車庫を持つ層にやや多い	1例を除き、すべて持家	特に傾向なし	新しい家に比較的多い
消極的定住型（タイプ4）	上に同じ	上に同じ	自宅内駐車層にやや多い	上に同じ	上に同じ	特に傾向なし

注．表頭の数字はクラマー係数の平方根を示す．

条件と態度の型との関係では，ことがらの性質からして，前者が後者を規定する関係にあると必ずしもいえないためであろう．また，関連の背後に，より基底的な他の条件があることも考えられる．例えば，＜自覚的定住型＞に借家層がやや多いのは，低年齢層やUターン者が多いことによると考えられる．少なくとも，ある種の生活環境条件が態度の型の形成に重要な要因となっていることを物語るものは，今回の分析からは得られなかった．強いていえば，除雪道路までの距離が比較的長い層に＜転出志向型＞が多い点にこのような関係が見出せそうであるが，断定は難しい．

4.2　態度の型と雪害観

態度の型による分析に先立ち，態度項目と雪害観項目の一部について，個別に関連度をみたのが表8である．ここでは，いずれも二分法的項目であるため，四分点相関係数[*7]を用いた．これによれば，態度指標のうち雪の問題との関連を織りこんだ項目を除くと，相関係数の値はおしなべて小さく，個々の指標のレベルでの態度と雪害観との関連はあまり強くない

表8　個々の態度指標と雪害観6項目の四分点相関係数

雪害観項目 / 「態度」指標	雪害の宿命視の是非	雪害の技術的克服の是非	雪と楽しくつきあう姿勢の是非	雪害への対処から連帯感が育ちうるか否か	計画的なまちづくりが必要か否か	雪害対策のための建築・土地利用規制の是非
A．移住／定住	-0.062	-0.015	-0.026	-0.033	0.008	-0.001
B．都会／田舎	-0.044	-0.047	0.012	-0.097	0.032	○-0.169
C．科学技術の進歩	-0.035	0.004	0.055	0.039	-0.041	-0.060
D．人間の力／自然の力	-0.051	0.095	0.062	○ 0.140	-0.023	0.017
E．人生の順調さ／苦労	0.005	-0.017	-0.089	-0.099	-0.013	○ 0.132
F．自立／互助	-0.071	-0.033	0.034	-0.026	-0.074	-0.048
G．個性／つきあい	○-0.122	0.016	0.030	-0.023	0.045	0.015
H．雪国はつらい／楽しい	0.099	-0.067	○-0.168	○-0.113	-0.032	○ 0.150
I．雪処理は無駄／役立つ	0.035	0.019	◎-0.243	○-0.143	-0.044	0.028
J．雪の人間関係への影響	0.026	-0.002	○-0.162	-0.074	-0.032	0.063

注．絶対値が0．2以上のものに◎印、0．1以上0．2未満のものに○印を付した．

＊7　二分法的な2つの属性間の積率相関係数．正・負の完全関連時にそれぞれ＋1，－1の値をとる（安田，1969）．

表9　「態度の型」別にみた雪害観の特徴

雪害観 態度の型	問題視の程度 0.15	雪害対策のポイント 0.21	雪害は宿命であり耐え忍ぶべきだ 0.17	雪害は克服できるから方策を工夫すべきだ 0.27	雪と楽しくつきあうべきだ 0.21	雪害との戦いから住民の連帯を育てるべきだ 0.19	雪害対策のためなら建築や土地利用の規制可 0.32	生活道路の雪処理 0.16	親せきや知人の家の雪処理の手伝い 0.10	居住空間更新時の雪対策 0.22
自覚的定住型（タイプ1）	かなり低い	行政への期待（依存）が最も強い	50%	100%	75%	81%	94%	行政主導を望む者比較的多い	しない者が比較的多い	やや関心が薄い
転出志向型（タイプ2）	最も高い	住民と行政の協力・近所の協力	46%	69%	54%	69%	46%	住民主導とする者最も多い	しない者が比較的多い	関心が薄い
積極的定住型（タイプ3）	やや低い	住民と行政の協力とする者が多い	52%	93%	75%	82%	91%	住民主導とする者多い	した者が比較的多い	平均的に分散
消極的定住型（タイプ4）	かなり高い	行政への期待が強い	41%	100%	57%	90%	90%	住民主導とする者多い	しない者が比較的多い	関心が高く、「最優先」に集中

注．表頭の数字はクラマー係数の平方根を示す．%を付したのは肯定的回答の比率である。

ことがわかる．

次に，態度の型別にみた雪害観の特徴は表9の通りである．なおこれには，雪害観に加えて，同じ調査の中で調べた雪への対応に関する2つの事実についての態度の型との関連も示してある．クラマー係数でみるかぎり，表8・表9よりは小さいものの，客観的諸条件と雪害観の直接の関連度の測定に比べ，約4倍前後の値を示している．なお，［どこまでを雪害というべきか］の項目については省略したが，これに関してはあまり明瞭な傾向は見出せなかった．

態度の型の中では，＜転出志向型＞が最も特徴的である．この型では，［暮しの中での雪の問題］を苦とする程度が最も強く，反面雪害の克服や利雪，あるいは雪対策への努力の可能性などについてはかなり悲観的である．あたかも，自らの転出を前提として極めて覚めた見方をしているかのようである．

＜自覚的定住型＞は，逆に［暮しの中での雪の問題］への苦痛感が4つの型の中で最も弱く，＜積極的定住型＞と並んで雪国の暮しを楽しむべきという姿勢が強い．この背景には，現在の生活を「自分に向いている」「分相応」として選びとったという態度上の特性があることは容易に想像できる．また，この型では雪害の技術的克服，雪害対策のための私権の規制などに対してもある程度積極的な態度が読みとれる．しかしその一方で，［雪害の軽減・防止上一番大切と考えるもの］（雪害対策のポイント）では，行政への期待ないし依存が最も強く，［生活道の雪処理］でも行政主導を望むものの比率が4つの型の中では最も高くな

っていることも見逃せない．

＜積極的定住型＞と＜消極的定住型＞を比べると，前者は全体として積極的な態度が目立つが，後者も雪害の技術的克服，雪への対応を契機とする住民の連帯への期待感はむしろ前者より強く，雪害対策のための私権の規制に対してもかなり積極的といえる．しかし，この＜消極的定住型＞では，行政への依存感が強く，利雪への積極性は薄い．なお［暮しの中での雪の問題］への苦痛感は＜積極的定住型＞では低いが，これは実際に問題が少ないとは考えにくく，むしろ苦労を人生の糧とするというややストイックな態度の反映ではないかと思われる．

雪への対応事実と態度の型の関連をみると，居住空間更新時の雪対策[*8]では，＜転出志向型＞が比較的対策に力を入れていないことは当然としても，＜消極的定住型＞が最も積極的に居住空間の耐雪性の向上を図っていることは興味深い．これに比べ，＜積極的定住型＞はこの点に関して必ずしも積極的とはいえない．また，親せきや知人の家の雪処理の手伝いは，いわば＜積極的定住型＞の態度の実践に通じると思われるが，その割にはあまり多いとはいえない．

5. 結論

多雪地方都市住民の「雪害観」について，その相違を生むさまざまの要因について検討してみた．その結果，雪害観が住民主体のもつ諸々の客観的条件に個別的に規定されて存在していると考えるよりも，両者の間に総合的な「態度の型」を考え，これを媒介とする客観的諸条件と雪害観の関連のあり方を検討することによって，よりわかりやすく，かつ深い理解を得ることができた．

住民の態度の型の典型として，以下の４つが抽出された．それは，＜自覚的定住型＞＜転出志向型＞＜積極的定住型＞＜消極的定住型＞である．

この４つの型の内容の検討および客観的諸条件や雪害観との関連については，既に詳述したので繰り返さないが，冒頭の課題意識との関連でその意味するところを述べれば，次のようにいえよう．

第１は，近年増加しているＵターン者層をどうみるかということである．都市生活を経験しているこの層は，地域社会の活性化や主体的力量の強化の担い手として高く評価される傾向が強い．しかし，今回の結果を見るとこの評価にはやや疑問が残る．Ｕターン者層の中に

＊８　新築移転，建替え，増改築，建物の追加新設や取りこわし，屋根の更新が過去10年間にあった例について，その際の雪対策について尋ねた（沼野，1983）．

＊９　「雪と楽しくつきあう」「雪国のくらしは楽しい」という回答特性を考えれば，この型の人々には冬の暮しをより豊かにするための個性的な発想や実践が期待されてよい．

は再転出志向が意外に強い上に，定住を志す者にも個人主義的傾向が強い．彼らにとって地方定住の選択は，往々にして「周囲にわずらわされない静穏な生活」への隠遁を意味するとさえ思える．この層に多雪地域の振興や雪害対策の担い手としての主体的力量の発揮を求めるためには，上記の特性の理解を踏まえて，その意欲を引きだすための意図的な努力が必要であろう*9．

第2は，＜積極的定住型＞の評価についてである．土着の，地域社会の中核的位置にある人々を中心に，定住と雪問題に対して積極的な姿勢をもつこの型が存在し，しかも4つの型のうち最も数が多いことは，ある意味では多雪地域にとって心強い要素といえよう．しかしながら，この型は別の見方をすれば最も「建前」的ともいえ，「本音」的な＜消極的定住型＞との間に，案外相互移行の可能性が高いようにも思われる．この意味では，この型に分類される人々の実際の雪への対応行動に注目してみる必要があろう．反面，＜消極的定住型＞も必ずしもマイナスイメージで見るべきではなく，「本音」的であるが故に健全ともいえる不満感を，地域における雪への対応の力に生かしてゆく視点が必要であろう．

今回の分析は，雪害意識の構造分析という大きな課題全体からみれば，いわば初歩的な試みの1つにすぎない．例えば，「総論賛成，各論反対」といわれるように，より具体的な局面における「本音」の表出に目を向けて態度の分析をすすめることが，緒論に述べたような雪害対策の内容検討や合意形成の見通しを得る上では重要となろう．また，雪処理行動や雪への対応の諸形態との照合も必要と思われる．さらに，態度の型は価値意識のあらわれに他ならないことを考えれば（見田，1966），既往の意識研究の成果の吸収も重要である．今後に残された課題といえよう．

謝　辞

原稿を閲読して頂き，貴重な助言を頂いた中村　勉新庄支所長に感謝致します．また，統計処理プログラムの作成について助言を頂いた統計数理研究所の大隅　昇研究員，集計作業をして頂いた渡辺千和さん・松田あや子さん，調査に協力頂いた市民各位および新庄市役所の担当職員各位に謝意を表します．

参　考　文　献

1）総合開発研究機構・東北経済開発センター（1979）：積雪地の地域開発に関する調査研究．156 pp.
2）沼野夏生・東浦將夫（1982）：多雪市街地の冬期生活における2・3の問題とその規定要因について．国立防災科学技術センター研究報告，№27，279−301.
3）沼野夏生（1983）：多雪地方都市における居住空間更新と雪処理．日本雪氷学会秋季大会講演予稿集，講演番号152.
4）弘前大学雪問題法制研究会（1982）：豪雪対策関係法の法社会学的研究．日本積雪連合，242 pp.
5）見田宗介（1966）：価値意識の理論．弘文堂，379 pp.

6）文部省統計数理研究所（1976）：行動計量科学のための統計解析用プログラム・パッケージの開発報告書．91pp．
7）安田三郎（1969）：社会統計学．丸善，382 pp．

（1983年12月8日　原稿受理）